

## 第7章 グローバル化するポピュリズム

### 1. アメリカ（トランプ旋風）（189頁～196頁）

#### （1）流れ（189頁～192頁）

当初は泡沫候補扱いされていたがエスタブリッシュメントに対する容赦ない批判、メキシコ人移民を犯罪者扱いする挑発的な発言で一気に関心を集めることに成功

「アメリカ第一主義」を打ち出す

→大統領選挙に勝利

#### （2）トランプの勝利をもたらしたのは誰か（193頁～196頁）

「ラストベルトと呼ばれる旧工業地帯の人々」、「忘れられた人々」

→イギリスのEU離脱を支持した「置き去りにされた人々」との共通性

### 2. 日本とオランダ（196頁～199頁）

#### （1）「日本維新の会」の躍進（196頁～198頁）

①自民党と民主党への失望

②ポピュリズム的な政治手腕

→無党派層の幅広い支持を獲得

#### （2）橋下徹とフォルタインとの共通点（198頁～199頁）

①「『既成政党では選択肢がない』とみる有権者の幻滅が広がった」

②「事実上の個人政党を作り上げ、メディアの注目を集めた」

③「リーダーシップを強力に発揮できる政治体制への改革」を求めた

### 3. EU内及びフランス、ドイツ（200頁～213頁）

#### （1）2014年欧州議会選挙（200頁～204頁）

「実務型」の政治の典型であったEUは次なるポピュリズムのターゲットとしてふさわしい対象だった

→欧州市民が選挙を通じ、欧州委員会の委員長を左右できるようになった

⇨ポピュリズム政党が「反EUを訴える格好の舞台」として選挙を利用

→フランスやイギリス、デンマークなどでポピュリズム政党が第一党になる

→英仏のポピュリズム政党の存続を支えた貴重な機会

#### （2）フランス、ドイツでの新展開（204頁～213頁）

フランス：「国民戦線の現代化」

マリーヌ・ルペンによる極右的イメージの払拭

ライシテ原則、同性愛者やマイノリティの権利保護の立場からイスラムを批判

→三大政党の一角へ

ドイツ：「ドイツのための選択肢」

ユーロ危機を経て、ユーロやEUに対する不信が高まるなかで新党「ドイツのための選択肢」が結党される

→既成政党に失望する人々や経済的に遅れている東側の人々からの支持を得る

排外主義的な性格の強まり

党の裾野が拡大し、右翼勢力の強い旧東独地域で多数の議席を獲得するとリ

ベラルな雰囲気であった党は様変わり

イスラム過激派によるテロ事件の続発や難民の大量流入を背景に支持拡大

#### 4. ラテンアメリカとヨーロッパの「二つのポピュリズム」の違い（213頁～221頁）

ラテンアメリカにおけるポピュリズム（「解放」志向の左派ポピュリズム）とヨーロッパにおけるポピュリズム（「抑圧」型の右派ポピュリズム）を分かつものとは何か

##### （1）社会的背景の違い

ラテンアメリカ：圧倒的な社会経済的格差

ヨーロッパ：公的セクターが充実、批判のターゲットは公的部門により「便益」を享受しているとされる人々

##### （2）論理の違い

ラテンアメリカ：「政治文化的な批判」という側面が弱い

ヨーロッパ：「政治文化的な批判」という側面が強い

##### （3）スタイルの違い

ラテンアメリカ：「バルコニーから演説する」

ヨーロッパ：「テレビから視聴者に語りかけ、インターネットを通じて発信する」

#### 5. 全体のまとめ（221頁～232頁）

##### （1）リベラル・デモクラシーがはらむ矛盾（221頁～224頁）

現代のポピュリズムは、「リベラル」や「デモクラシー」といった現代デモクラシーの基本的な価値を承認し、むしろそれを援用して排除の論理を正当化する

##### （2）ポピュリズムの持続性（224頁～225頁）

福祉排外主義や反 EU という、既成政党が採用しがたい政策理念を身にまとうことによって、各国のポピュリズム政党は、既存の政治に違和感を持つ有権者の支持を持続的に集めることに成功しており、風頼みの存在を脱しつつある [実務型デモクラシーの正当性が救済型デモクラシーの理念にある程度依拠していることからくる矛盾](#)

##### （3）「改革競争」という効果（226頁～232頁）

ポピュリズム政党が進出することは既成政党に改革を促す効果を持ち、デモクラシーへの信頼の回復に貢献する可能性がある